

エムシャーパーク(上) ドイツ

自然再生と産業遺産活用を通じた地域創生

古田尚也

UCN日本リエンジニアリングデザイナー

150年にわたりドイツの一大重工業地帯として栄えたルール地方。近年は産業構造とエネルギー構造の転換によつて、長期的な衰退に苦しんできた。エムシャーパークは、自然再生と産業遺産の活用によつて衰退地域を再生するための、重要な社会実験といえよう。

撮影●古田尚也

ドイツ重工業の中心地としてのルール地方

ルール地方は、ドイツ中西部でオランダとベルギーに国境を接するノルトライン・ヴェストファーレン州に位置する。エッセンやドルトムントなどの11の工業都市を含む50以上の自治体から構成され、人口は510万人を擁し、鉄と石炭産業の集積地として、19世紀から150年間にわたり重工業の中心地としてドイツ経済を支えてきた。しかし、石炭から石油へのエネルギー源の移行や産業構造の変革によつて、第2次世界大戦後の

1950年代には最初の生産過剰が発生する。60年代にも再び鉄や石炭の生産過剰が起きた。当初、こうした現象は一時的なものであると考えられたが、徐々に構造的な問題であることが明らかになる。こうして70年代から80年代にかけて、ルール工業地帯に集積していた石炭鉱山や製鉄所は徐々に閉鎖に追い込まれ、失業や汚染された環境だけがこの地域に残された。

政府もこうした状況の中で、た手をこまぬいていただけではない。ルール地方の課題は、重工業にあまりにも特化していたために、その他の要素が大きく欠けていたことであった。例えば、大学などの高等教育機関が存在せず、州政府の機関も立地していなかった。

このため、政府は60年代にこの地域に7つの新しい大学を作った。現在では、年間25万人の大学生がこの地域で学んでいる。また、80年代に入ると、政府はコンピュータやソフトウェアなどの新しい技術をこの地域に導入するために、複数のテクノロジーセンターも整備した。

こうした歴史の中、1989年から経済、社会、環境のすべての面で疲弊した地域再生のため10年間の実験的事業として始まったのが、IBAエムシャーパークであった。

地域再生のために実施された IBAエムシャーパーク

IBAエムシャーパークとは、国際建築展を意味するIBAと、この地域の中心を流れる河川であるエムシャー川の名前を組み合わせた造語である。IBAとは、ヨーロッパで長い歴史を持つ伝統的アプローチで、国際的なデザインコンペを通じて街づくりを行っている



2001年に世界遺産に登録されたツォルフェライン。産業遺産と緑のコントラストが美しい。



1 現在ツォルフェラインでは、多彩な文化イベントが開催されている。



2

2 貨物車両がそのまま公園の中に展示されている。



3

3 線路跡が遊歩道として利用されている。



6



7

6 ツォルフェラインの敷地内の各所には、工場跡の施設をうまく活かしたレストランやカフェも設けられた。
7 オレンジ色が印象的なルール博物館の入り口。

のイメージが付きまとうこうした産業遺産をなるべく排除して、地域の新しいイメージをつくらうと模索していた。

しかし、IBAエムシャーパークでは、産業遺産を人々にとって大切なものだと考えた。過去の産業遺産を壊すと地域のアイデンティティも失われてしまう。IBAを指揮したカール・ガンザー教授は、IBAを進めるにあたり、まずこの地域にどのような産業遺産が残されているかインベントリ（目録）を作った。そして、実際

に現地で現物を見て、残すか残さないかを決めていったのだという。IBAのプロジェクトがきっかけとなって、数多くの遺産がこの地域に残され、新たな地域資源として活用されるようになった。現在では、年間500万人もの観光客がこうした産業遺産を見るためにルール地方を訪れる。

こうしたルール地方の産業遺産の代表的な事例のひとつが2001年に世界遺産にも登録されたツォルフェライン炭鉱である。ルール地方の中心都市の一つエッセ

ンに位置し、19世紀半ばに操業を開始したこの炭鉱は、一時期は、最大8000人の労働者が働くドイツ最大の炭鉱として繁栄した。特に、1932年に完成した第12採掘坑の設備は、パウハウス様式の機能美によって、かつて世界で最も美しい炭鉱と呼ばれた。

しかし、時代の変化には逆らえず、1986年12月にはこのツォルフェライン炭鉱も閉鎖されることとなる。1993年には、併設されていたコークス製造ラインも閉鎖された。当初、地元自治体のエッセ市はこれら炭鉱に残された設備をすべて壊すことを計画する。しかし、その産業遺産としての価値から保全を望む声が高まり、IBAエムシャーパークのプロジェクトの一つとして再生されることになった。

エムシャーパークのプロジェクトの対象となったエリアは、面積が全体で100ha。ここに、第12採掘坑やコークス製造工場、石炭の洗浄施設、貨物線跡などが残されていた。IBAのプロジェクトでは、これらの産業遺産がさまざまなアイデアで再生された。例えば、高さ90m、幅40mもある石炭の洗浄・分別施設は、リノベシヨンされ、ルール博物館としてよ

いくという手法だ。東西に伸びるエムシャー川の流れには、ルール地方の中心部に位置する17の自治体が含まれ、その面積はおよそ800km²に達する。IBAエムシャーパークでは、この地域全体を対象にして事業終了までの10年間に、戦略的方针に沿って25億ユーロ以上の資金で、100以上のプロジェクトがIBAの手続きに沿ってワークシヨップとデザインコンベンによって実施された。

IBAエムシャーパークで採用された戦略的方针は、「地域の弱点に重点的に対処する」というもの。具体的には、都市としての魅力、アーバンランドスケープ、文化的アイデンティティ、産業遺産、自然

環境（特にエムシャー川の水質）などに焦点が当てられ、7つの重点テーマが設定された。

また、IBAエムシャーパークの全体テーマとして、「古い産業都市の未来のためのワークシヨップ」が掲げられた。このテーマに沿って、行政だけではなく、市民や、各分野の国内外の専門家、アーティストなど、さまざまな分野の人々が誰でも参加できるフォーマル、インフォーマルな場で、アイデアを出し合い、協働しながらプロジェクトを作り上げるという参加型のアプローチが全面的に採用された。



8

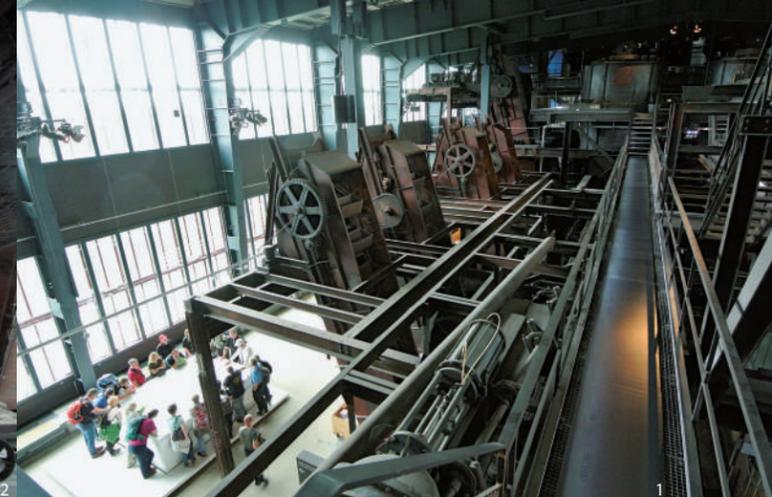


9

8 エムシャー水系再生のために、地下30mに埋設工事が進んでいる下水道の模型。
9 エムシャー川は、汚染のために危険で、人も近寄ることができない。



2



1



4



3

1.2 ツォルフェラインで博物館に再生された、石炭を洗浄し選別するための施設。当時の施設がそのまま残され、活かされている。
3.4 博物館では、ルール地方の自然、文化、歴史など幅広い資料が展示されている。
5 1932年に完成したツォルフェライン第12採掘坑の設備は、パウハウス様式の機能美によって世界で最も美しい炭鉱とも呼ばれた。

1999年に開催されたIBAエムシャーパークフィナーレでは、こうしたプロセスを経て実施されたプロジェクトの成果が一堂に集められ、発表、展示、共有された。

産業遺産を活かした地域アイデンティティの確立

IBAエムシャーパークが掲げた7つの重点テーマの一つは「産業遺産」であった。ルール地方には、閉鎖された製鉄所や炭鉱など数多くの産業遺産があった。しかし、80年代までは、こうした過去の産業遺産は次々に壊されていった。地元自治体も、公害などの負



エムシャー水系の再生と ランドスケープパーク

IBAエムシャーパークが掲げ

売却される予定であった。また、オーバーハウゼン市は、この場所をショッピングモールとして再開する計画を検討していた。しかし、IBAの一環としてカール・ガンザー教授が他の専門家と一緒にこの場所を訪れ、実際に現物を見て、この施設を残そうという決断を下したのだという。

その後、IBAエムシャーパークのプロジェクトとしてリノベーションが行われ、現在、この施設は各種の展示イベントに使われるようになり、地域の人たちの誇りにもなっている。

これらの事例に見るように、IBAエムシャーパークでは、産業遺産を効果的に再生し、活用することで、地域の文化的アイデンティティを継承することにも成功しているということが出来るだろう。

たもう一つの重点テーマは、エムシャー水系の再生であった。エムシャー川は、ルール地方の中心を東西に流れ、ライン川に合流する河川である。その一方で、著しい汚染の川としても知られていた。エムシャー川は、100年以上にわたり開渠型の下水道として利用され続け、現在でも家庭や工場からの未処理の排水がそのまま流されている。川の土手はコンクリートで固められ、人が誤って転落すると危険なことから、鉄条網で囲われ近寄ることもできない。また、この地域では長年の地下での採掘活動による地盤沈下によって水系の人工化が進み、自然が失われた。このように、エムシャー川は、ルール地方の環境汚染を体現する負のシンボルでもあった。

IBAエムシャーパークでは、あえてこの負のシンボルともいえるエムシャー川の名前をその事業名に入れ、エムシャー川の自然を再生することを重点テーマの一つとして取り上げた。

支流も含めたエムシャー川水系の自然再生プロジェクトは1989年に開始され、現在も進行中である。具体的には、汚水のための下水管を地下30mに埋設し、エムシャー川には雨水だけが流れるようにすることで、自然を取り戻す取り組みが進められている。事業が完成するのは、2020年の予定だ。

IBAエムシャーパークが自然環境の分野で取り組んだもう一つの重点テーマは、エム



1 ランドスケープパークのインフォメーションセンター。
2 ランドスケープパークに設けられた自転車道のルートマップを説明するマイケルさん。
3 インフォメーションセンターのローズガーデンは、もともと汚水処理場だった。
4 ランドスケープパークは、全体で457km²の面積がある。

シャールンドスケープパークの整備である。

ルール地方の20の自治体の広域連合組織であるRVRで当初からIBAエムシャーパーク事業にかわり、自らもエムシャーランドスケープパークの実現可能性調査に携わったマイケル・シュワルツロドリアン氏は、「エムシャーランドスケープパークが実施されることになったのは、この地域を再生するためには、生活環境の質を高める必要があること、そのためにアーバンランドスケープの魅力が高める必要があるという認識

が生まれたことが背景になっています」と指摘する。

エムシャーランドスケープパークは、ルール地方の20の自治体が、都市と都市の間にある緑地を公園として整備していくという合意を元に進められているプログラムだ。事業開始当初320km²の規模で開始されたランドスケープパーク事業だが、その後拡張され、現在は457km²の面積が対象となっている。IBAエムシャーパーク対象地域全体の面積が800km²であることを考えると、そのかなりの部分を占める一大プロジェクトだと

いえるだろう。

しかし、これだけ東西に長く、広大な面積を一括してトップダウン的に管理することは現実的ではない。このため、事業エリア全体は7つに分割され、それぞれのエリアを近接した自治体によるワーキンググループが管理するという仕組みで事業が進められている。

具体的には、マスタープランに添って、産業遊休地を買い上げて緑地として整備したり、既存の緑地とつながったり、自然再生を行ったりすることで、段階的に整備が進められている。また、これらの緑地を周遊する自転車道の整備や遊歩道の整備も併せて行われている。

「エムシャーランドスケープパークでは、一つひとつのプロジェクトを実施しながら、教訓を学び整備を進めてきました。全体に画一的な基準を適用するのではなく、各地域の事情にあわせてボトムアップ的にデザインをしています」とマイケルさん。

1999年にIBAエムシャーパークの事業期間が終了したあとも、事業エリアを拡大し、エムシャーランドスケープパークの整備は継続して続けられている。エムシャーランドスケープパークは、ルール地域全体を形作る骨格として、地域全体の魅力向上に貢献しているといえよう。

5 ガスメーターの屋上から見たルール地方の風景。手前の運河に平行して流れるのがエムシャー川。
6.7.8 ガスを貯留するタンクをリノベーションして、展示場に再生した。
9 高さ100mを超えるガスメーターは、地域のランドマークとして、また、文化的アイデンティティとして今では地域の人々の誇りとなっている。



Naoya Furuta

大正大学地域構想研究所教授。
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得退学。
三菱総合研究所を経て、2009年より
IUCN (国際自然保護連合)の日本オフィスにおいて
生物多様性に関する国内外の政策展開に従事する。